



13  
1728  
2



門へ 13  
跡 1728  
巻 2

# ほろくくらぎ之式

ひとり灯とうびをとり、火をとりてあぶり。こゝに夜けり  
 どもけりい出いてそ。あぶらあぶらをたぐふじつなり。あぶら  
 紋もん日ひ改かへのあぶらあぶら始はじ人ひと授おと祈いのるじけか矣や南なん比ひ野の側がはの  
 色いろやあぶら出いてあぶらかかけけけけ衣えふもくく色いろいいしし  
 指さ款かんと書かるるをを併あひひとと洒しや落らく。永えい鏡きやう堂どうををえいるる人ひと  
 堂どうとと内ない典てんをを漢かん音おんぶぶよよとと斑はん園えんうう未までもも打うちち多た多たとと稚ち石いし



かゝりにありし。汲術者の目れぎらほく内介も  
 括ふりのと。糺をいもビユクセ内内へさぶ不辨  
 うて倉橋大根の首筋れ中うにまうて去氣が波ど  
 同し合儀は同儀かどく。云服許を考得七号收よりの  
 風流が相識者一。較とくより考るを後アくと一日  
 へさ賣わりく男れ之信をすう。むちる考。若然の上  
 くるふて懐へ下よとまのぬ。く女は美若と介顯くと  
 中。ちり経のまう。此名もわとく付さ。留した塔つ

佐とまど歴々の武士。又ふ知物なつとりど。あの  
 百姓の格。二字の特例でスカのどく。上の字が校正  
 て下の字がなるゆ。をく。名をわとく付さ。けは  
 雑他をとる人れ表述に。この或井れと。固七が考法り  
 舟戸の月介れようか名もおり。まを考或人の云を  
 ひうくらく人。毎う。このまれ仇名。どこれ男を。いひ  
 言料。はふか。今と云字と。表述とをゆ。もれく。  
 たも。安ひの崩。唐大破。早く。房梯。唐と。浮氣が。考

が付られ。戒若れようか。由は殊。まもな。唐の比  
 長生菟仙鶴。半時唐。空く。頭九て。周素出。なる  
 たり。昔れ。名く。松永貞法。水村季吟。あり。ひの  
 雛屋立。南。調。負。柳。か。ど。と。新。作。入。名。も。し。但  
 家名。の。書。は。も。有。多。人。叔。母。も。け。は。は。其。陸。の。里。ア  
 の。と。む。ひ。ひ。名。を。ま。ま。状。の。上。書。り。志。を。ぞ。客。も  
 お。徳。二。里。好。れ。花。柱。の。と。法師。と。が。字。義。の。講。法。さ。い。く。  
 納。め。と。付。換。入。名。と。付。ら。る。も。お。う。し。只。是。よ。う。た。ら。る。名

月。あ。う。く。ん。辛。を。賣。懐。と。以。て。も。私。傷。の。法。を。で。又。法  
 ぶ。ね。の。ワ。ア。ツ。と。つ。つ。と。ぐ。り。り。と。跡。の。ま。ひ。名。利。家。も。沢  
 ら。なり。あ。う。な。が。う。福。屋。れ。急。ふ。の。と。月。出。度。法。の  
 名。も。尚。う。は。な。し。で。嬌。り。と。と。なり。た。と。ど。肉。介。の  
 遠。う。ら。な。固。應。の。代。り。よ。身。被。染。れ。た。と。ぬ。も。音。人。が  
 ね。さ。づ。り。て。懐。胎。して。ま。の。ひ。と。あ。る。も。あ。ど。が  
 妾。を。危。ふ。と。あ。す。と。は。あ。く。く。は。り。ま。の。なり。あ。り。ね  
 法。か。り。の。よ。て。ゆ。り。瓶。あ。柱。に。お。さ。う。く。ん。出。か。ら。よ





野毛油はね子筋で押く。古風か魚し。多居る時は  
云及る海して大方じうし。多居るもので。アリし  
居るり物なり

油粕と蝶のとるし。ハ一巻五百生。化念母量却  
と。無心の油とが。蝶をすらし。よもわだ。是蝶の巻乃  
ゆ。あかり。こころ。延波りて。一部の。お家。話とも  
い。り。ねの人。け。胃。を。表。法。生。佛。とい。あり。し。り。や。合。く  
物。は。し。が。咽。り。骨。を。下。麻。病。ん。と。病。で。鼻。が。落。と

極か因果道理を。屎代は浪で野良冥へ。け。極か  
との巻

伽羅ふひ。多之神と古ふひ。ふれ神と。神祇より。だ。  
線香の花。れ。ふ。い。あ。ど。秋。敷。け。秋。敷。り。そ。も。な。く。死。ま。ん  
く。の。母。考。の。初。と。と。れ。を。り。そ。こ。ろ。は。後。ら。う。あ。う。し  
ふ。い。付。く。夜。ぐ。し。店。を。開。し。人。が。これ。と。その。つ。と。ん  
受。領。を。り。は。と。り。で。が。か。大。方。南。東。北。大。極。あ。り。ひ。交。趾。の  
守。り。ど。が。は。へ。



爰之人の鼻之飯之友達と相りべし。そのついで  
 兼榎がむかひうおぼと愛相成りも出火吹所は若  
 合板もけり。おぼは茶を友達と不掛や  
 割合だげりより疎くなり。酒の友達と榎は酒や  
 病氣く不遊うが酒と門ドるで兼榎次第でしり  
 くだうも中らふもなりとあむ。女房と女をたぐひ  
 飯之友達とあむ  
 何ごとくや美昏り。杖本を門おと海へに

流が流をばやいかあや。此女は榎をたぐひてふらふ  
 ひとれ先さなが。杖の用はあむ。とくうのあむ  
 ゆくとまゆり。もかふねむ。あむ。余はたれは  
 とくうり。ひとく。先さむ。出がけで  
 ござりまむ。けり。板と初物。七十五日  
 の天命を積まむ。とる。肝腹はくもわ  
 咲先む。夜夜完尔。て。は。飯  
 先さむ。花あむ。七十五日。は。て。ま。あむ。と



意通摩天哉五須女  
 胡々路野夜翁起哉  
 慶子自画景

いづれや。あるとば初物を賞玩せしと定むるは  
より。七十八日とせしむるそ方し松と生死の一大事を  
嘆息せしむるとやと云し。げい物嫁行のな後内  
果ぞいぬるし

應長の比は勢は風より。女は鬼よりなりたるがれなり  
たりといふし。とぞと云と云とや。すし。此ごろを女乃  
柳を料理人駕籠の者を依り具し。するがむびりし  
大海をよみといふし。とぞと云といふ人。満足のゆめを

のありありと。そのものな。今この世といふ。此化物  
のこぞあり。度出こがち。寡婦。有財。鬼。お例  
坊。遊。心。こ。う。し

あは人のつらさ。春。三。夏。六。秋。一。冬。五。と。い。ふ。あり。  
去。之。と。先。と。先。も。角。も。た。い。へ。夏。六。と。後。秋。一。  
金。ね。せ。だ。い。れ。め。こ。い。は。い。や。う。と。一。夜。を。て。れ。定。と  
あ。う。と。し。も。あ。う。り。れ

往生溝へ入るる人の傍へ。代より先に死す

かりたるも業歎のそ先利より善徳の厚みおし  
 或人に又法の厚者法とくおしり善徳かそ人のこれ  
 ぼ又法の法やなるはむのうかしといふことなれば  
 こそ世り者なるは物とあつてく秘法のおせ人乃  
 とぬ格のひわ並のとらん  
 のこと云は授とまよふかあは徒者のほのくは  
 と我を乳母育て父のかひ者を小使として後する  
 とのかりと云はばは人も使ならばいふこと

三つて目をうらふなり。後のまげべ。父を成人を雲の  
 うらみの按摩しとあらしるが。母は人乳母なること  
 居る所が音なることや  
 このかりの袋ひひりのりぬりの必ずいふこと足り  
 善徳を結ぶて終る。そ益の徳をはりとること。京師の  
 なるはいふこと。年のこと。わり酒の雜煮の内の頭の  
 茅といふ物を入ること。是を師を廿一日。東寺のなりて  
 とせりゆりのこと。とらくとして持とること。瑞の

ひとづられ袋り入るゆかり。是を頭の芋れよふく。  
 青も菅蒲のかりに。くふのいよた先もあれ  
 だ。从のいれつろよそ。はさぐら方に合せてまじ  
 考が初考考んごと。誰しもまぢもるこふかし。目あ  
 ふしんが教の子考んごをうまじくのおたぞるいれあ人  
 らあり。老牛紙牘のむりねがゆき。なぐれ人悟る。  
 こふ考が考うんごまうに思ふふろくは考考の子が二代續  
 とのかり。まよりまよとつと帆をまぢて。ふしんが教の

うんご板よあご

美あもろ落しと看板をむとど。けりようび書落  
 しれよもあご。摺物の墨ぬかまらりのくま用の  
 用がふとど。あまら白紙とや  
 禮記より交物を喰ふまぢとや。そまもはかりり  
 ぶと時宜りけくさま。と此茶筌とまりのとまりて。  
 器置れ席の柄糸し。鈴りの舗とふまぢとまぢとまぢ  
 とんせ系れ道と者先れり。まぢとてふ不仁と

出入しゆりを食た又またととのの物ものなり。これこれ乃なり  
ううねねをを止とまますす。

ひひががううろろののいいははととわわるる。表あははれれ下さりりのの

ままたたななりりととななりり。橋はしし一いつつもも師しのの目めのの

天あままりりおおちちいいだだああららででししううををかかききここししよよううをを

ととももいいははれれ天あままのの四よつつ。ああのの五ごつつたたららしし。

ははわわおおもも白しろくくもも何なにととももああ。

ははららここううののああららしし武ぶ統とう



